

耶馬壹国問題を概観して (1)

社 河 内 一 郎

始めに。わが古代史の中で、古くてしかも常に新しいその著しいものは、確かに邪馬壹国に関する諸問題であると思う。これはわが南北朝時代以降、識者によって意識されるに至ったがこの問題を廻って明治時代以来、特に邪馬壹国の所在などについて関係学者の間に大きな対立が表面化し、殊に近くは1967年、かの宮崎康平が“ほぼろしの邪馬台国”を公にし、新説を発表してからにわかに論争が激化し、まさに論議は百花繚乱の姿を呈しているのである。本拙稿に於ては、主題の通り素朴ながら重点主義に立ってこれを簡潔に概観・考察してみたい。なお、邪馬壹国の国名の表現であるが、多数関係学者や論者は改訂された邪馬台国を用いている現状としても、筆者は古田武彦の解説に同調し、“魏志倭人伝”の原本に明示されているように、邪馬壹国をとりたく、従って多数説と異なり、以下の記述文では主として邪馬壹国の表記によるので、御諒承を得ておきたいと思う。また、関係諸学者・論者の氏名もすべてその敬称を省略したのでこの点も寛恕を願いたく、さらに関係諸学者・論者の高著を従横に引用させて戴いているのでこれもまた御同様に。なおまた、細部の例としては魏使はすべて郡使に（多数の学者・論者は、魏使をあてるが、“倭人伝”では明らかに郡使としているので、一貫してこれを用いることにした。）、朝鮮は場合に依じてほとんど韓国と統一的表現の方法をとっておいた。実は、筆者は多年にわたり、いささか西洋史学（特にアメリカ史）を専攻する者にて、一応日本史学は専門外で、為に日本古代史の知識も極めて浅薄、所謂盲目者蛇におちずのたとえの通り、学界論争の一層の活性化・結実化を認識・念願し、あえてこの拙文を綴った次第で、従って文中、幾多の誤謬や過剰ないし過小記述もあると考えられるのであるが、これらの不備も格別の御

許しを願っておきたいと思う所である。

さて、日本古代史研究の中で、最も興味を引きかつまた、最も重要な問題は邪馬壹国問題従って邪馬壹国論争のそれではないかと考えられる。邪馬壹国ないし邪馬台国の文字は、わが古事記や日本書紀の中には見られないが、かの北畠親房(1293—1354)以降の諸学者によって意識され、室町時代の瑞瑛周鳳(1392—1473)は、“善隣国宝記(1466)”を、江戸時代に入ると、松下見林(1637—1703)は、“異称日本伝(1693)”，新井白石(1657—1725)は、“古史通或問(1716)”を著して邪馬壹国大和説の前駆をなし、本居宣長は(1730—1801)，“馭戒概言(1777—78)”を出して古道説を唱え熊襲が邪馬壹国女王卑弥呼を偽称したとして、始めて邪馬壹国九州説に立った。然し、これらは邪馬壹(台)をヤマトと読み、一は九州山門(筑後)に語呂を合せたものだった。明治時代に入って、内藤虎次郎(1866—1934)は、“卑弥呼考(1970)”などを以て大和説を唱え、これに対して、白鳥庫吉(1865—1942)は、“卑弥呼問題の解決(1969)”などによって九州説を主張し、ここに大和説と九州説とが激しく対立するに至ったのである。しかも、邪馬壹国の位置についても、大和説では“倭人伝”に見える“南の方位”は不可で、南は東のあやまりとし、九州説では、“南水行十日陸行一月”は水行十日或は陸行一月とし、さらに、“陸行一月”は一日のあやまりと指摘する状況である。そして今日、和田清・石原道博の“魏志倭人伝(1951)(岩波文庫)”が出てから、“倭人伝が広くかつ容易に読まれるに至り、邪馬壹国問題についての一層の関心が異常に高揚されたとされている。ところで、先ずこの邪馬壹(台)国論争に関する文献であるが、これは極めて多数現存し、一一列举するに暇もない程であるが、主要関係文献は以下、記述の間にそれぞれ表示することとし、ここではとりあえず甚だ僅少ではあるが、筆者の所蔵する分を一応列举しておきたい。

宮崎康平：まぼろしの邪馬台国(1967)

山尾幸久：魏志倭人伝(1972)

- 大林太郎：邪馬台国（1977）
水野 佑：古代王朝99の謎（1978）
山田宗睦：魏志倭人伝の世界（1979）
森 浩一：伝人伝を読む（1982）
邦光史郎：邪馬台国の旅（1976）
水野 佑：大和の政権（1977）
松本清張：古代史疑（1968）
松本清張：邪馬台国99の謎（1975）
松本清張：古代史記（1982）
上田正昭：倭国の世界（1976）
榎 一雄：邪馬台国（1975）
佐伯有清：研究史邪馬台国（1971）
井上 薫：邪馬台国問題と研究の現状（1969）
鬼頭清明：邪馬台国論争の歴史と現段階（1969）
三品彰英：邪馬台国研究総覧（1970）
井上光貞：邪馬台国の政治構造（1966）
上田正昭：倭国の世界（1976）
小林行雄：女王国の出現（1967）
古田武彦：邪馬壹国（1969）（史学雑誌78—79号）
古田武彦：失われた九州王朝（1973）
古田武彦：邪馬台国はなかった（1976）
古田武彦：邪馬一国の証明（1980）
高倉盛雄：邪馬台国は筑紫にあった（1981）
古田武彦：邪馬壹国への道標（1978）
古田武彦：邪馬壹国（1980）
古田武彦：邪馬壹国の証明（1982）

さて先ず、倭ないし日本のわが国号の名称についてであるが、倭名の起源は明確でなく、古代中国人や朝鮮人の呼んだもので、日本の存在は既に

紀元前後に中国に知られ、“漢書地理志”に倭人の記事が見え、次いで、“後漢書東夷伝”に倭人が中国に渡来したとの記事があり、三国時代の“倭人伝”や、また、“宋書倭国伝(宋の正史((420—479)), 513年, 梁の沈約の撰, 100巻)”に421—78年の南朝と交渉した倭の五王(讃・珍・済・興・武)の記事が見えている。そして、倭とは、後漢の許慎(30—124)の“説文解字(100年成立, 15巻)”によれば、素直・従う姿・廻って遠い姿・柔順を意味し、“漢書・後漢書”には、“天性柔順, 順児人に従い委の声。”とあり、また、この倭は遠く周時代から一定地域の呼称だったと考えられている。なお、松本清張は、“倭人伝”の著者、陳寿と“魏略”の作者、魚豢は倭と倭人を書き分けていると指摘しているがこれは注目された所である。次に日本の名称であるが、その確かな最初の記事は、“漢書地理志, 燕地之条”に見える“楽浪海中倭人あり, 分れて百余国となる。”であるが、新唐書(宋の宋祁((998—1061))の撰, 225巻)には、“倭の名を悪み更めて日本を号す。使者自ら言う, 日出づる所に近し。以て名となす。”とあり、倭は唐代(618—907)から日本と改称されたようである。また他方、朝鮮の一記録なる新羅本紀(500年頃からの記事が確実とされる。)には、文武王(661—80)670年12月の条に、“倭国更めて日本を号す。自ら言う, 日出づる所に近し, 以て名をなす。”とあり、“三国史記(高麗の仁宗時代, 金富軾の撰, 12世紀)”では、日本の名称は7世紀後半具体化されたとし、その記事の中に、新羅は北方で靺鞨に連なり南は倭人と接すと見えている。同様のことは、高麗の普賢国尊一然(13世紀末)の“三国遺事”にも見られるのである。なお、“三国史記”は、新羅本紀・高麗本紀・百濟本紀などから成り、高麗本紀に倭山, 百濟本紀に倭・倭国・倭王・倭人の文字が見え、その多くは日本列島内の倭を意味するようである。然し、必ずしも然りではなく、高句麗の長寿王が414年に建立した好太王(広開土王)の好太王碑にある倭や倭府の場合もある(井上秀雄: 任那日本府と倭((1973)))。なお、5世紀以前の倭関係についての日・中・鮮三国の文献を次に列挙してみよう。(1)山海経(戦国時代((B.C.403—B.C.221))に成

立。前漢時代 ((B. C. 202—A. D. 8)) に増補し前漢の劉歆が哀帝 ((B. C. 7—1)) に献上、著者不明、倭に関する確実な最初の記事かとも言われる。) “蓋国 (B. C. 6年頃今の平壤を中心とする) は鉅燕の南、倭 (南鮮を指すか) の北にあり。倭は燕に属す (燕は、河北・山西・遼寧にわたる古王朝、春秋時代、薊に都をおく)。(2)論衡 (後漢の王充 ((27—97)) の作、85巻) “周の時天下太平、越裳 (ベトナム南部) 白雉を献じ、倭人凶艸を貢す。白雉を食し、凶艸を服するも凶を除く能わず。成王 ((B. C. 1115—1079)) の時、越裳雉を献じ、倭人暢草を貢す。” (3)漢書地理志(下) 燕地之条 (前漢の班固 ((32—92)) の著) “玄菟・楽浪、武帝の時おく。皆朝鮮・濊・貉・句驪の蛮夷、殷の道衰え、箕子去りて朝鮮に之く。その民に教うるに礼儀を以てし、田蚕・織作せしむ。貴む可き哉。仁賢の化や、然して東夷の天性柔順、三方の外に異る。故に孔子、道の行われざるを悼み、設し海に浮かばば九夷に居らんと欲す。以有る也矣。楽浪海中倭人あり。分れて百余国を為す ((松本清張は、この倭人は倭国の意とし、百余国は多数の村落共同体と解する))。歳時を以て来り献見すと云う”。

(4)井上秀雄：朝鮮における古代史研究と倭について (1973)

鬼頭清明：任那日本府の検討 (1976)

鈴木英夫：新羅本紀一倭人・倭兵記事の検討 (1976)

古田武彦：失われた九州王朝 (1973)

山尾幸久：任那日本府と倭について (史林、56巻6号)

金 錫亨：朝鮮史料から見た5世紀末までの朝日関係 (1969)

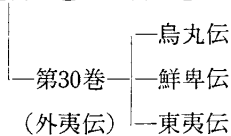
李 鐘恒：三国史記に見える倭の実態について (1977)

次に進んで、中国の古文献に見える倭人の記事を今少し詳しく眺めてみよう。(1)魏略 (西晋の魚豢 ((不詳)) の作、西晋 ((265—316)) の太宗年間の成立、38巻) “倭は帯方の東南の大海の中にあり。山島に依りて国を為す (始めて倭と山島との連結を明らかにした。)(2)三国志魏書東夷伝倭人之条 (西晋の陳寿 ((233—297)) ((文帝、司馬昭の太康年間)) の著、280—89年に成立。三国志全65巻の中、30巻) “倭人は帯方の東南大海の中にあり。山

島に依りて国邑を為す。旧百余国。漢の時朝見する者あり。今使訳通じる所三十国。”(3)後漢書倭伝(南宋の范曄((398—445))の著, 120巻の中)“国皆王と称す。世々伝統, 其大倭王居邪馬臺国。倭は韓の東南大海の中にあり。山島に依りて居を為す。凡そ百余国。武帝朝鮮を滅してより使訳漢に通じる者三十許国。”(4)宋書倭国伝(梁の沈約((502—557))の著)“倭国は高麗の東南大海の中にあり・世々貢職を修む。”(5)南齊書倭国伝(梁の蕭子顯((—537))の著)“倭国は帯方の東南大海の島中にあり。漢末以来女王を立つ。土俗己に前史に見えたり。”(6)隋書倭国伝(唐の魏徵((—643))の著)“倭国は百済・新羅の東南にあり。水陸三千里。大海の中に於て山島に依りて居る。山島に阿蘇山あり。”(7)旧唐書倭国伝(後晋の劉昫((887—946))の著, 200巻)“倭国は古の倭奴国なり。京師を去ること一万四千里。新羅東南の大海の中にあり。山島に依りて居る。”(8)旧唐書日本国伝(同前)“日本国は倭国の別種なり。その国日辺にあるを以て故に日本を以て名と為す。或は曰う, 倭国自らその名の雅ならざるを惡み, 改めて日本と為すと。或は云う, 日本は旧小国, 倭国の地を併せたりと。又云う, その国の界, 東西南北各々数千里。西海・南海は咸な大海に至り, 東界・北界は大山ありて限りを為し, 山外は即ち毛人の国なりと。”(9)新唐書日本国伝(宋の宋祁((998—1061))の著, 225巻)“日本は古の倭奴なり。京師を去る一万四千里直に新羅の東南, 海中の島にありて居す。”(10)宋史日本伝(元の脱々((314—55))の著)“日本国は本の倭奴国なり。自らその国日出ずる所に近きを以て, 故に日本を以て名と為す。或は云う, その旧名を惡みこれを改むるなりと。その地東西南北, 各々数千里。西南は海に至り, 東北隅は隔つるに大山を以てす。山外は即ち毛人の国なり。”ところで, 上記諸文献に見える山島であるが, この字句は“山海経”や“漢書地理志”には出ないが, 以上の文献には見られる所で, この山島は明らかに九州島を指すものと考えられる。古田武彦は, “邪馬壹国の道標(1978)”の中で文献学的にこれを追究し, これを“津軽海峡の論理”と呼称し, 山島の東境に津軽海峡はなく日本のある島の東境にこの海峡は存在するとしたので

ある。さて、世界で始めて倭国の中核なる邪馬壹国に関する記事を見出し得るのは、前記の3世紀、280—289年に於て編纂された中国、陳寿の著述になる“魏書東夷伝倭人之条”(わが国では普通これを魏志倭人伝、さらに略して倭人伝と呼んでいる。)(わが紀記の編集より500年以上も前の成立である。)(中国の三国時代((220—280)))である。そこで、邪馬壹国の存在は3世紀故に、この“魏志倭人伝”の著述された年代と、その唯一の原本とされる南宋(1127~1297)の紹興本及び紹熙本の編纂された年代、12世紀に比して約900年の年代差を持つことを考えれば、全く不可思議と言わざるを得ない。然し、この長期間の中に新たな記録の見出されない現在に於ては、この両原本のみが唯一の典拠となるものである。そして、紹興本は1131—62年に刊行され(中国、上海商務印書館の涵芬楼に現存)、他方、紹熙本は1190—94年に出版され(1—3巻を除き、62巻が日本宮内庁書寮に現存)たものである。わが国の“魏志倭人伝”研究学者・論者は多く紹興本によるが、古田武彦・山尾幸久・山田宗睦や松本清張らは紹熙本を史料としている。次に、“三国志65巻”の構成を簡単に表示すれば次の通り。

魏書30巻・蜀書15巻・呉書20巻



東夷伝(扶桑之条・高句麗之条・沃沮之条・挹婁之条・濊之条・韓之条・倭之条)

ここで、特に注目すべき一項は、烏丸伝の序である。即ち、そこには、“烏丸・鮮卑は、古の所謂東胡なり。その習俗・前事は漢記を撰ぶ者己に録してこれを載せたり。故に漢末・魏初以来を挙げて、以て四夷の変に備えん。”と見えている点である。さて、“三国志”の著者なる陳寿であるが、彼は西晋(265—419)の武帝(236—290)の泰始5年(269)、中国、巴西郡(郡治は四川省、閬中県、その南方なる南充市)の中正官で、泰始

10年に“蜀相諸葛亮集24編”を著わし、その後、著作佐郎から著作郎に進んだが、これは遅くとも太康1年(280)以前のことである。この時、彼は“三国志”を書き上げたわけである。その“魏志”は、陳寿がかの魚豢の“魏略38卷”によって記述されたと一般に見られているが、“魏略”は現存せず、逸本は現在あり、例えば、張鵬一や張蘇金の著(翰苑)などである。しかも、“魏略”には紀・志・伝があり、三国時代の人々について、儒宗伝・清介伝・純固伝・勇狭伝・遊説伝も述べられている。然し、魚豢に関しては、京兆(洛陽)の人と伝えられるのみで、その経歴・生歿年などについては全く不詳。但し、“魏略”の記述が具体的かつ詳細を極めていることは確かだとされるのである。然し、陳寿が果して“魏略”を実際に披見したか否かには問題があると山尾幸久は、その著なる“魏志倭人伝(1972)”に於て指摘を加えている。ところで、“魏書東夷伝”の原本は前述の通り二種のみであるが、紹興本、紹熙本共に全文2,006文字から成ることは同一であることに変わりはない。次に、邪馬壹国の国名に関してであるが、この読み方にも諸種あり、宮崎康平は、ヤマタ或はヤマテと読み、山尾幸久は、ヤマトとし、古田武彦は、邪馬壹国は即ち、山倭国でヤマキと読むとし、“邪馬台国はなかった(1976)”p. 314以降に、その根拠・理由について詳説しているが実際は、ヤマイツとしている。また、前述のように、新井白石や松下見林は、ヤマトと読んでいたのである。ところで、邪馬台国は原本の邪馬壹国の壹が台に改訂されたもので、その端緒は“後漢書東夷伝”で、そこには、“国皆称王，世々伝統，其大倭王居邪馬臺国。”と出ているので、邪馬臺はヤマトと読み易いこともあってか、占部懐賢・北畠親房や松下見林らは、壹は臺の誤りとして以降、これが一般説化したものである。また、橋本増吉は、“史学雑誌(1913年，10号)”で、“邪馬台国及び卑弥呼について”の論稿を記し、邪馬台は大和で、卑弥呼は倭姫命とすればこれは無意味とし、さらに、彼は、白鳥庫吉説を支持して、邪馬台国は筑後の山門郡とし、これに対して、内藤虎次郎は、“倭面土国”なる随筆で、倭面土国は大和としたが、これらは地名的考察によるものだった

た。渡辺対男が、“邪馬台国卑弥呼女山（1914，筑紫史談）”なる随筆に於て、邪馬台国は、筑後の山門郡で、卑弥呼の居宅は、女山部落の山内にある神籠石（古代の祭祀址或は朝鮮式山城と言われるが不詳。）に着目したのは画期的なことだった。高倉盛雄の解説では、これは神秘的な築城群で、筑紫地域についてこれを見れば、神籠石はこの地方の外周または近傍に所在し、その構築年代・構築者や築造目的は全く不明とある。その位置を見れば、ほぼ山岳部の斜面で、100-400 m. の稜線を列石でつくった道が 2-3 km. に及ぶ。また、その内側には小川を持つ低地を含んでいる。神籠石は、神のこもる神秘的な石造の城で、神の祭祀には好適の場処であり、かつまた、宮殿の位置としてもかっこうの所である。この筑紫地域の神籠石（8個）については、次の一覧表があるのでここに引用してみよう（高倉盛雄：邪馬台国は筑紫にあった（(1981) p. 158）。

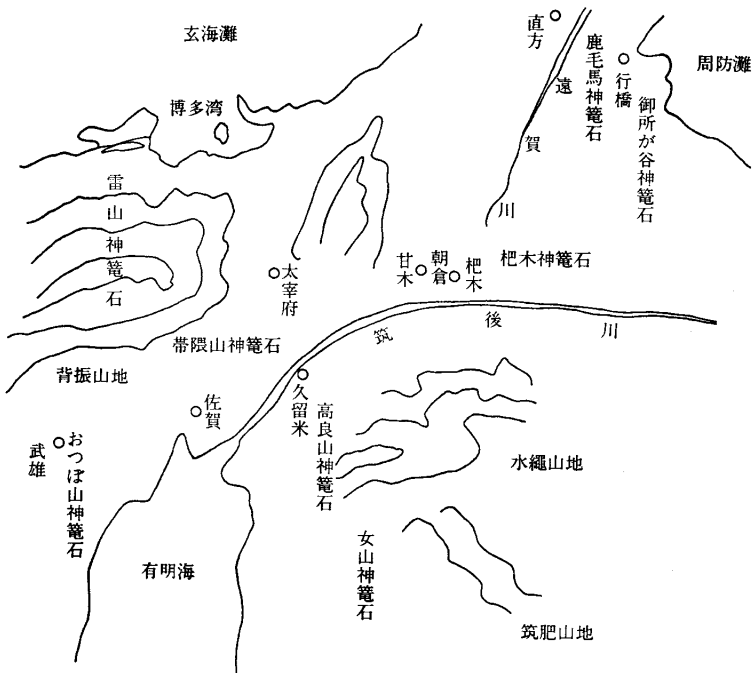


図1 (高倉盛雄：邪馬台国は筑紫にあった ((1981) p. 156)

名称	所在地	標高	土石外周
杷木	筑前	147m.	2.3m.
高良山	筑後	250m.	2.5m.
女山	筑後	200m.	3.0m.
帯隈山	肥前	177m.	2.4m.
おつぼ山	肥前	66m.	1.8m.
雷山	筑前	400m.	2.3m.
鹿毛馬	筑前	80m.	2.0m.
御所が谷	豊前	250m.	2.6m.

さらに、これらの神竈石の位置を略図で示せば、次の通り。(図1参照)

さらに次に、8個の神竈石の中、杷木神竈石をとり上げて、その位置を図示してみれば。(図2参照)

なお、神竈石に関する文献としては、白鳥庫吉の“所謂神竈石について((1901))”や渡辺対男の“邪馬台国卑弥呼と女山((1892))”などがある。そして、女王国時代に現在見るような規模の神竈石が設けられたか否かは別に、“倭人伝”にある宮殿の規模はこのようなものではなかったかと推定し、神竈石の構築年代が明らかになれば古代史解明上甚だ有意義ではあるまいかと、高倉盛雄は指摘する。また、女王の居宅を狭小地域に制約する要はないが、杷木や高良山の2神竈石と基肄の山城は、施政上・対外防衛上、好適の位置にあると言うべく、従って、女王の居宅は朝倉の地であり、故に邪馬台国は朝倉を中心に筑後平野に存在したと主張するのである。さて、いよいよ進んで、“倭人伝”の中、特に重要と思われる部分について、これを重点的に眺めてゆくわけであるが、ここでは一般学者・論者の叙述の方法に変えて、果して邪馬壹国は大和の地にあったのか或は九州方面に存したかという本命に関する二大論争に関して、これを簡潔ながら図式的表示にしたら如何かと考え、短絡的かつ抽象的ではあるが以下、紹介・追跡してみたい。邪馬壹国の国名は、前述の通り古田武彦説により紹興本に見える所を忠実に引用するのが筆者には妥当と考えられるので、

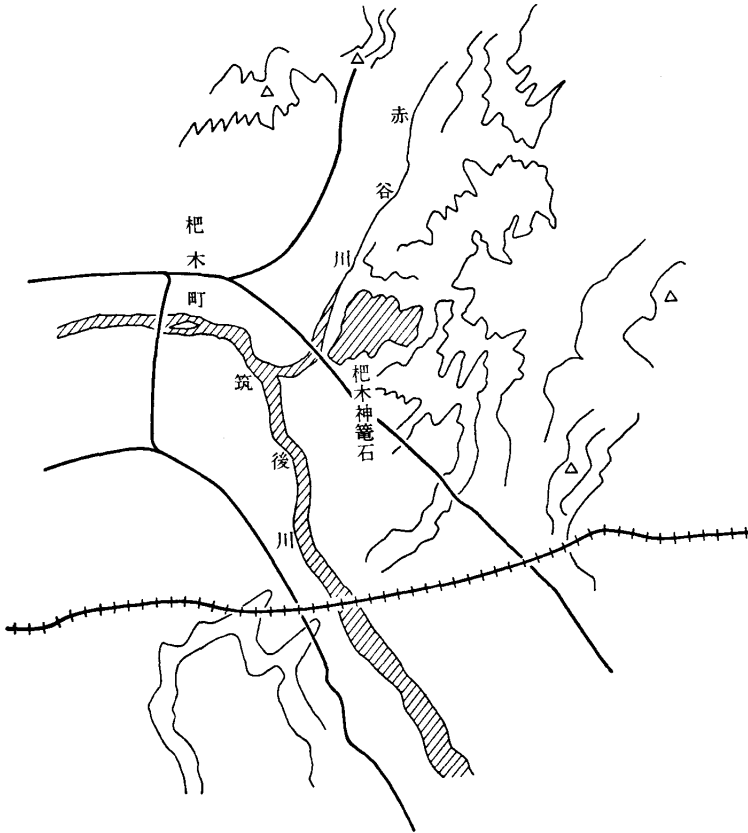


図2 (高倉盛雄：邪馬台国は筑紫にあった ((1981)) p. 161)

学者・論者の本意にそいつつもこれを用いることとした。

(1) 邪馬壹国大和説 (邪馬壹国は主として、大和の磯城郡・古市郡・山辺郡・高市郡辺りに存在したとする。)

卜部懐賢 (13世紀後半、鎌倉時代の中ごろ, “釋日本紀”, 28卷)

唐人は日本を倭奴と呼ぶが、邪馬壹も邪馬堆も元は共に倭のことであり、卑弥呼は神功皇后であるとした。そして、邪馬壹国は邪馬台国の誤りとする。

北畠親房 (1293—1354) (“神皇正統記 ((1339))”)

後漢書に、“大倭王邪麻堆”とあり、さらに、“案今名邪麻堆音之訛也。”とあり、これを合して、“其大倭王居邪馬臺国”が出来たもので、邪馬壹国は大和と推定する。

瑞溪周鳳 (1392—1473) (“善隣国宝記 ((1466))”)

彼は、“右神皇正統記の載する所大がいかくの如し。”と述べ、大和を示した。然し、彼は一面、“海を度ること復た国あり——もしこれを以て日本となさば、楽浪海中百余人の倭人とは何れの国を指すか。”として、九州説も暗示する。

松下見林 (1673—1703) (“異称日本伝 ((1693))”)

“今捺邪馬臺 (ヤマト) 国は大和也。”として、大和説を明示した。そして、彼もまた、卑弥呼を神功皇后と信じている。

新井白石 (1657—1725) (“古史或問 ((1716))”)

“後漢書に大倭王居邪馬臺国と見えしは即ち、今の大和国を言いしなり。”とした。然し、後には九州説に転じて筑後山門説を唱えた。

内藤虎次郎 (1866—1935) (“卑弥呼考 ((1970))”・“倭面土国 ((1867))”)

かの九州説の橋本増吉は、“邪馬台国及び卑弥呼について (1867)”なる随筆に於て、内藤虎次郎の説くように、彼は邪馬台国は大和で、卑弥呼は倭姫命という仮定に立つ故、これが誤っていればこれは無意義とし、邪馬台国は筑後山門郡とし、日程記事には無関係と唱えているが、これに対して、内藤虎次郎は、“倭面土国”を発表して、後漢書倭伝にある“安帝の永初元年 (107) 10月、倭国使を遣わして奉献す。”さらに、“安帝の永初元年、倭面上国王師升あり。”とあるが、これは、後漢書の原文では、倭面土国の師升だったと推測し、かくして、邪馬台国と倭面土国とは共にヤマトであろうと唱えた。然し、山尾幸久によれば、後漢書は、“大倭王の居す邪馬臺国”とし、倭奴国や倭の面土国の朝貢を記すので、面土国は邪馬台国ではなく、

邪馬台国は地名でなく、国名としてB.C. 2世紀末に成立したと見ているのである。

笠井新也 (“邪馬台国は大和なり ((1906))”)

邪馬台国は大和が妥当で、遺跡や古墳文化から見て然りとする。なお、不弥国は奴国から百里の地で、今日の福間の地とし、“倭人伝”の“南投馬国に至る。”“南邪馬壹国に至る。”の不弥国から邪馬壹国への方向は、南でなく東とすべきとし、倭人は山陰沿岸を東進して敦賀に上陸、陸行一月で大和へ入ったとする。また、奈良県磯城郡三輪町の東北なる三輪山周辺に所在する箸墓古墳によって大和説を唱えている。

上田正昭 (“日本古代国家成立史の研究 ((1959))”・“邪馬台国問題の再検討 ((1958))”・“倭国の世界 ((1976))”)

大和の三輪山系には神岳や神山を中心に茶臼山・メスリ山・箸墓・向山・天神山・櫛山・東大寺山などの前期古墳群が存在し、崇神の宮殿は磯城郡の瑞垣宮、垂仁は同じく玉垣宮に宮殿をおいていたとし、邪馬壹国を大和の地に比定する。

山田孝雄 (“狗奴国考 ((1922))”)

邪馬台国への方向記事の南は東と見るべきとする。

喜田貞吉 (“漢籍に見る倭人記録の解説 ((1917))”)

倭人は山陰ぞいに大和へ入ったと見る。

豊田伊三美 (“邪馬台国論を読んで ((1922))”)

“倭人伝”行程記事の“水行十日陸行一月”は、“水行十日或は陸行一月”とし、“陸行一月”は、“陸行一日”とする。

志田不動麿 (“謎の女王 ((1956))”)

“水行十日陸行一月”は、“水行すれば十日、陸行すれば一月”とした。

田辺昭三 (“謎の女王卑弥呼考 ((1968))”)

2世紀の大和地域は、即ち、大和盆地・河内平野なる畿内の中

心で、内海航路を掌握し、その勢は北九州へ及んだと考える。

三品彰英 (“邪馬台国研究総覧 ((1970))”・“民族学から見た魏志倭人伝 ((1971))”)

邪馬台国は広く近畿地方とし、南を東と改めるより日本を南方におくべきだとする。

山尾幸久 (“魏志倭人伝 ((1972))”)

詳細な音韻の研究から入って、例えば、比定地に異説のない対海国(対馬国)は、“隋書倭国伝”に“都斯麻”とあり、わが古典に見える“津島”で、一大国(壹岐国)は、わが古典に“壹伎・以伎・伊吉”とあって一支であろう。また、伊都国は、“伊斗・伊靱・恰士”の地名にあてたものである、さらに、邪馬壹国は紹興本でも紹熙本でも然りとする。然し、“後漢書”では、そこには、“天子の居る国”の意もあり、10世紀までの写本時代には壹を臺と記した写本の系列も存したのだからとする。そして、8世紀の住民は、畿内の大和を記すに、“等・登・騰・苔”などの音仮名を用い、3世紀半ばにもヤマタイと発音したのは正確であるとしている。さらに、奈良盆地には、3個の地域集団とその周辺に4個のそれが併存し、邪馬壹国はこれらの連合体国家だったと推定する。即ち、奈良盆地は、秋篠川・寺川や布留川によって東北・東南・西南に区分され、東北部は春日山と佐保川を持ち、奈良坂を越えればその先きは近江を経て若狭湾・敦賀湾に出る。ここには佐紀古墳群や樺本古墳群がある。東南部には三輪山や初瀬川があり、墨坂を越えれば伊賀へ通じる。そこには崇神陵・景行陵・箸墓古墳などの大和・柳本古墳群・桜井茶白山古墳やメスリ山古墳・鳥見山古墳群がある。西南部には葛城山と葛城川があり、大坂戸を経て河内へ、古市・萱田古墳群を経て百舌古墳群で大阪湾に出る。次に、奈良盆地周辺の4集団は、東は笠置山地、南は和泉山脈、北は淀川

・宇治川の範囲内と見られ、(1)現在の柏原・羽曳野・富田林の各市と南河内郡の一部即ち、南河内勢力(2)大東・河内・八尾・枚方の各市即ち、中河内勢力(3)相楽・久世・綴木の諸郡即ち、北河内・南山城勢力(4)堺・泉大津の各地即ち、和泉勢力である。彼は、このような地域的・古墳文化的検討によって強力に大和説を主張する。

江上波夫 (“日本民族の起源 ((1958))”)

わが大和朝廷は、朝鮮から渡来して倭人を征服した征服王朝であり、これによってわが後期古墳文化が始まったと考える。即ち、大陸北方系騎馬民族、南ツングース系の一派、森林狩猟民族が4世紀前半、南鮮から渡来して倭国へ来り4世紀後半から5世紀に及んで大和へその中心勢力を移動して確固たる政権を樹立したが、彼らは弥生式文化の勢力圏を避けて豊予海峡に入り、北九州を東廻りして日向に上陸、豪族の応神朝が生誕(但し、水野佑は、応神は狗奴国の統治者と見ている。)、やがて、大和へその勢力を移動したとする(水野佑は、この征服王朝説を真向から否定する)。然し、一面に於て、3世紀前半から後半への邪馬壹国の位置を土地や遺跡を離れて論じたのでは単なる解釈論にすぎず、史的事実ではないとし、考古学や文献学の上から大和説を否定しているのである。但し、大和説の主唱者たちが大和の前期古墳から出土する遺物や漢鏡を根拠として、前期古墳は3世紀末から4世紀のものとは認めるが、それは、後漢・魏時代のもので、多数の副葬品の存することやその同範鏡が大和を中心に全国的に分布することから見て、後漢・魏時代の鏡の所持者は、邪馬台国の子孫であったとするが、同範鏡の最も多い三角縁神獸鏡が魏の鏡か否かは未詳で、その鏡が大和に集中したとしてもそれは問題であると見る。

(2) 邪馬壹国九州説(邪馬壹国の位置を九州地区に比定する説であるが、

同じ九州内でも諸説がある。即ち、博多沿岸とその後背地・筑後山門郡・島原地方・大分県の宇佐地区・京都((みやこ))郡・春日市・肥後菊池郡・肥後玉名郡・大分県の山戸地区・八女市((岩戸山古墳あり。松本清張は、これが通説とする))・甘木地区・甘木朝倉地域など。

本居宣長(1730—1801) (“馭戒概言((1777))”)

彼によれば、熊襲は卑弥呼を偽称したとし、邪馬壹国を九州地域と考えた。また、熊襲は狗奴国だろうとし、その領域は大隅を中心に薩摩・日向の大部を占めていたと見る。さらに投馬国から女王の都まで、“水行十日陸行一月”というが、大阪付近の海岸から1日で大和へ入れるので、陸行一月は一日の誤りだろうとする。また、不弥国や投馬国は筑紫地区の東方にあり、“周旋五千余里”も筑紫の洲(しま)を指すので、これらの島々を廻れば里程には合致するだろうと見た。

安藤正直 (“邪馬台国は福岡県山門郡に非ず((1927))”・“異説日本史((1932))”)

郡使は伊都国まで来てここにとどまったので、奴国以下邪馬台国までの方向・里程は伊都国に始まるわけであり、放射式読み方を用いて、邪馬台国は佐俣(熊本県甲佐町の奥)だとした。後に榎一雄がこの読法を展開して、画期的と評されたが、実は、安藤正直こそその先駆者だった次第である。(図3参照)

白鳥庫吉(1865—1942) (“倭女王卑弥呼考((1905))”・“卑弥呼問題の解決((1969))”)

九州説に立つ彼は、日本書紀が卑弥呼を神功皇后と考えるのは誤りとし、また、“倭人伝”の道里を計算して不弥国から邪馬台国へは正確だろうか、都より女王国に至るとは女王の都を指すものか、或は境界の尽くる所奴国を示すのか不詳であるとし、郡使の上陸地点は名護屋(呼子)付近、投馬国以東の上陸地点を向津野(周防の上之関)と推定した。そして、彼は、女

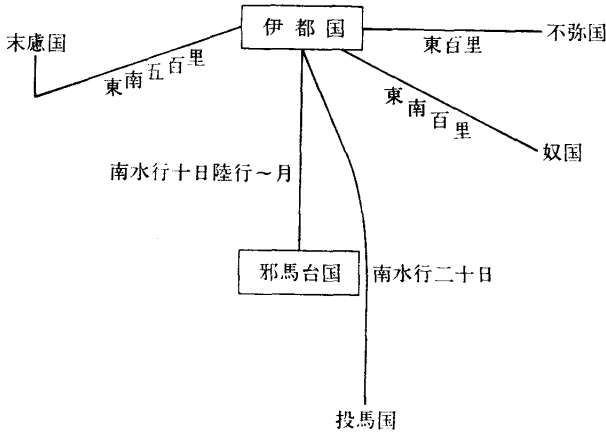


図 3

王の領域は、豊前・豊後・肥前・肥後・筑前・筑後の6国に広く及ぶとし、邪馬台国は肥後の内部にあったと見ている。

橋本増吉(1865—1942) (“東洋史上から見た日本上古史研究—邪馬台国論考(1956)”・“邪馬台国及び卑弥呼について((史学雑誌, 10—12号)) (1912)”)

不弥国から投馬国を経て邪馬台国へ至るには、“水行十日陸行一月”とあるが、これは内海路によらねば理論的に解し得ないとし、“陸行一月”は1日の誤りとする。また、南は東の誤りとする説があるが、郡から末慮国までの方位は正確でそれ以後は誤りというのは成立しない。さらに、邪馬台国と狗奴国は南北に連なり、邪馬台国の東方が海だったと見る。戸数も実数ではなく、文化相から考えて邪馬台国は筑後の内陸部にあったと主張している。なお、郡使は邪馬台国へ至ったとするのである。

菅 政友 (“漢籍倭人考(1890)”)

“倭人伝”の投馬国は、日向地方で、邪馬台国は投馬国より南

方，“水行十日陸行一月”の地は大隅・薩摩地域とした。琉球の土語にヤマトは薩摩を言い、往昔、大隅・薩摩地方は邪馬台（ヤマト）と呼称されていたのである。また，“陸行一月”は一日の誤りで、水行十日で大隅国なる佐多岬を廻って鹿児島湾へ入ったと考える。彼の考察には民俗学的裏づけによる所が多分に見られた。

水野 祐（“古代王朝99の謎 ((1978))”・“日本古代王朝史論序説”）

彼は、三王朝（崇神・仁徳・継体）交代説を唱える。所謂大和政権は、これが確立する前に大和部族国家が他のそれと同様、邪馬台国や狗奴国とは別に成立していたと推定する。彼が邪馬台国九州説をとる理由は次の根拠によっている即ち、(1)大和説では、“倭人伝”の邪馬台国を示す記述が東を南と誤記したとするが、これは古代航海者の知識を基にする故、方向を誤ることはあるまい。(2)大和説がとる伊都国から邪馬台国への距離に関して、“倭人伝”の里程・戸数の数字的記事は北九州沿岸までは信頼し得るとしても、それ以外の地域の信頼度は高くないので、これらには十分の信はおき難い。(3)邪馬台国の官職名とわが古典の人名・官職名に同一のものがあるとする大和説の根拠は、邪馬台国と大和国を同様と見るには不十分である。(4)“倭人伝”には卑弥呼の為に径百歩の古墳をつくったとあるが、高塚古墳は大和の出現で、当時九州には存在せず、卑弥呼の塚は必ずしも高塚ではなく、北九州に分布する支石墓だとも思われる。さらにまた、彼は、わが青銅器文化が九州と西中国地域の銅剣・銅鉾文化圏と東中国地方から近畿・中部に及ぶ銅鐸文化圏に成立したもので、前者が邪馬台連合国家、後者がこれと同程度に発展していた所謂原大和国家であるとし、九州説の立場から邪馬台国の位置を筑後川下流域と考え、筑後山門説を主張するのである。

榎 一雄 (“邪馬台国 ((1960))”)

従来の邪馬台国論争は、郡治から博多湾岸までの方向や位置はほぼ同様であるが、その後2個の見解に分裂するのは、“倭人伝”の方向記事を南のままと見るか東に改訂するかにかかっている。対海国から一大国は南だが、事實は東南であり、それは“倭人伝”が何処から何処へ向うと明瞭に記録していないからだろう。そこで、大和説では、日数や里数はほぼ正確であるが方向が異るとし、九州説では方向は的確だが日数・里数に疑問があるとするのである。さらに、中国の古地図では、九州が北方にあって本州がその南に連なる形状となっていて、これは中国人の認識の誤りで、その為に生じたのではないかとの構想も生まれたのである (“混一疆理歴代国都之図”，これは1402年((明の成祖の建文4年))，元寇の役後朝鮮で作製されたもの。)

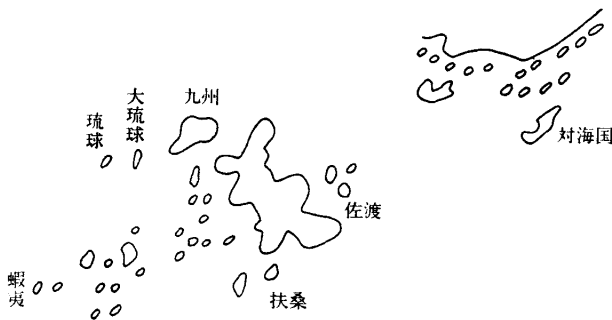


図 4

然し、それでは狗奴国が邪馬台国の南方に位置したとの記事に困難が生じる。また、大和説のように南を東とすれば、狗奴国も東とせねばならぬが大和の東方には存在しない。大和説では、日本海を航行して敦賀付近から大和へ入るとすれば、“水行十日陸行一月”も不都合ではなく、不弥国から水行二十日の

投馬国を出雲とするのも不自然ではないと見る。然るに、九州説では、不弥国から南へ二十日で投馬国、さらに南へ“水行十日陸行一月”で邪馬台国となっているので、邪馬台国を筑後山門郡とすれば距離が近すぎ、不弥国を奴国の東とすれば方向の不一致を生じるが、これに対して、彼は次のような解説を試みた(“魏志倭人伝の里程記事について”(1947))。即ち、{郡治から伊都国への記事は、前記の方位・距離を示して次に到達する地名を掲げる。然るに、伊都国からは方位・地名・距離を示す。これは、前者が狗邪韓国から対海国・一大国・邪馬台国各々への方位・距離を示すもので、後者は伊都国から奴国・投馬国・邪馬台国へのそれぞれの方位・距離を示し、伊都国から奴国・投馬国を通して邪馬台国への道程を記したのではない。伊都国は“郡使往来常所駐”とあり、また、一大率がおかれて外交事務を扱った点を考えると、郡使は伊都国に駐在してそこから前進しなかったのである。“倭人伝”を精読すれば、郡使は女王にあっていない。これは、女王が倭政権の執政者でなく住民の信仰の中心だったとする特殊状況が女王に郡使を直接引見しないとの理由を与えたものだろう。郡使が直接的交渉を持ったのは、おそらく女王政権の代理者なる一大率だったであろう。} と。続いて彼は、“邪馬台国の方位について”を発表して次のように述べる。即ち、{郡から女王国への距離が万二千余里で、伊都国から邪馬台国への距離は千五百里内外故、これは一日に五十里進んで一ヶ月の行程である。邪馬台国を伊都国の南方、水行なら十日陸行なら一月の所とすれば、“自郡至女王国万二千余里”は、 $10,500\text{里}+1,500\text{里}=12,000\text{余里}$ ということになる。また、“参問倭地絶在海中洲島之上或絶或連周旋五千余里”の周旋はうねうねと続く様を示し、五千余里は倭国の領域の出発点からその尽きるまでの距離で、万二千余里から

郡治・狗邪韓国間の七千余里を引いて五千余里を出したようである。また、魏人は、広義の倭国の領域を狗邪韓国に始まると見たので、“其北岸狗邪韓国”と記している。なお、郡使は伊都国にとどまり、以遠には行かなかったと考えられる。次に、伊都国には一大率がおかれたが、これはこの国が公孫政権と密着し、かつ倭国の中心勢力だったからであり、その任務は、“皆臨津搜露伝送文書賜遺之物詣女王不得差錯。”を“文書を伝送す。賜遺の物、女王に詣りて差錯するを得ず。”と読み、伝達の文書は、一大率が臨津搜露の結果を女王に報告したものであろう。かくして、南を東に改訂する必要はない。} と。一大率は、女王の軍事檢察機関で、いわば軍隊の総指揮者。大和説では、大和政権が派遣したとされ、九州説では共立の巫女群の首長、卑弥呼の派遣した者とする（一大率については、松本清張が“古代史記((1981))” p. 227-235 に於て、その新解釈を詳説している。)。さらに、榎一雄は、“水行十日陸行一月”は、“水行十日或は陸行一月”とし、これは相対的・比例的距離と見て、邪馬台国の筑後山門説をとるのである。

津田左右吉（“日本古典の研究 ((1948・1949))”)

倭人伝の方向・行程について、大和説の主張する南は東の誤りとするのは、“水行十日”・“水行二十日”とあるのに、南を東と見誤るはずがないとして、大和説を退けつつ里数と日数には疑問があるとする。それは、万二千余里から不弥国までの万七百里を引いた千三百里が邪馬台国への距離なのに、“水行十日陸行一月”を“水行して十日、さらに陸行して一月”と読んで、水陸合算して40日も要するのは疑問で、邪馬台国は筑紫の一地域を指すことが明らかだと津田左右吉は唱える。

(注) ここで、一言、筑紫の字句について触れれば、これはもと筑紫野から出たとも言われ、ツクシと読めば広義の九州島を

即ち、対海国・一大国から筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後・日向・大隅・薩摩を包括した地域で、チクンと読めば筑前・筑後地方だろうか (高倉盛雄：邪馬台国は筑紫にあった ((1981)) p. 41)。

富来 隆 (“邪馬台女王国 ((1960))”・“魏志邪馬台国の位置に関する考察 ((1953))”)

“倭人伝”に南と記された対海国と一大国の方向では、この南は今の東南である。伊都国・奴国が東南というのは今の東であり、方向記事は東方へ 50—60° ずれていると見るべく、東は今の東北となすべきで、奴国から投馬国への水行二十日は、南を今の東南とし、水行なら筑後川の上陸で、その地点に投馬国 (五馬) がある。かくして、河川による水行と陸行一日 (一月は一日の誤り)、そこから東北に海を渡って倭種の国ありという所が邪馬台国だとする。そして、青銅器文化圏の上から眺めれば、邪馬台国は東北九州にあり銅戈圏、狗奴国は平形銅剣圏、倭種の諸国は古式銅鐔の出た安芸方面であろう。従って、邪馬台国は豊前宇佐付近と推定するのである。